

R7 総括コメント (美術学部)

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
日本画	教授	岡田 眞治	長久手・長篠合戦図屏風の公開展示をして多くの来客があった。 学生参加の数多くの展覧会を企画、開催した。 第2回Primavera (津・松菱、4/2～7)、第1回清々会 (四日市・近鉄、4/9～14) 岡田眞治とPickupアーティスト特集 (名鉄、6/18～23) Ponte Domani (新潟・伊勢丹、7/16～21) Polaris 言祝ぐ春 (池袋・東武、1/29～2/4) 六甲会 (阪神、3/4～10)
日本画	教授	井手 康人	個展、公募展(院展)の審査、研究会など日本画創作活動とともに、芸術教育拡充を果たすための科研と学長特別研究の進展、さらには関連財団を設立し、理事長として東京でシンポジウムを開催でき、活動が大きく飛躍した1年となった。
日本画	教授	清水 由朗	各項目ともに充実できたが、特に教育活動では大学院生への支援に手応えを感じている。
日本画	准教授	吉村 佳洋	制作研究においては院展への出品が叶わず、反省すべき点である。次年度においては計画的に制作を行いたいと考える。グループ展等での発表においては、自身の研究内容を客観的に考察する事により、今後の制作に活かしていこうと思う。 教育活動、大学運営、社会貢献においてはその役割を十分に果たせたと考える。
日本画	准教授	岩永 てるみ	研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献共に当初立てた自己の計画を概ね達成出来たと考える。
日本画	准教授	阪野 智啓	個人的には東京藝術大学での課程博士最終年度で忙殺されたところが大きく、制作活動が減少してしまったことは反省点であるが、博士研究とも運動していた中世やまと絵屏風に関わる研究発表の機会に恵まれ、東大や東京藝大で展示および研究発表ができたことについては、今後の研究の発展に資するものと考えている。
油画	教授	倉地 久	研究・教育・運営・社会貢献に対して、バランスよく自身が努力し本務を遂行できたと考えている。特に、副学長・教研審メンバーとして、大学運営と業務に昨年より努力できたと考えている。
油画	教授	額田 宣彦	・研究活動～目標を達成、研究を深めることができた。 ・教育活動～ゼミ、作品講評会、討論会、レクチャー等を全学年に渡り実施。学生の自主性、思考力、実践力を育めた。学生研究アトリエが一部拡張され効果を実感した。 ・大学運営～欠員専任教員の補充が実施されなかったことに加えて、委員会部会等の業務に多く時間を取られ、研究、教育への時間が思うように割けずストレスを強く感じた。・社会貢献～「GROUND3」記録集助成金取得 (日東財団) 後、完成させ関係各位に配布した。
油画	教授	井出 創太郎	腐蝕銅版画を基軸としたプロジェクト『落石計画』は、2025年8月に「第15期」として実施し、銅版画試論と題した4回目の展覧会となり、腐蝕銅版画研究は深度を増し、着実に成果を上げる機会となった。岐阜県飛騨市宮川町種蔵集落での展覧会『光射す器 種蔵の影』は5年継続開催とした当初計画を完遂することが出来た。青山学院大学の教員・学生と井出研究室で協働・研究する「コミュニティ情報継承研究会」は、昨年度に続き岐阜県の補助金を活用することで年度計画としたR6年度の検証・改善・評価を実施し、継続した事業をおこなうことが出来た。来年度も本研究会を継続実施とし、事業成果の充実を図りながら、展覧会『光射す器/種蔵の影』の補強、導き手となる研究内容となるよう充実した活動として展開してゆく所存である。
油画	教授	高橋 信行	体調不良などもあり、忙しい割に充実した結果を残せなかった。
油画	准教授	増田 直人	計画した研究活動、社会貢献は実行 満足出来る。 研究活動は、個展でアクリル絵具の表現の幅を広げる事が出来、複数の展覧会に作品を出品出来満足のいく研究活動になった。 社会貢献は、中部国画会事務局の責任者としての活動、チャリティなど、評価出来る。 教育活動、大学運営について 労働組合で団体交渉、あっせん申請、交渉結果から、来年度以降の教育活動計画が法人より示された。今後について労働組合と相談し、対応を協議していきたい。労働組合からは教員組合が全く機能していない事県大の教員組合との連携がないことが組織として不十分と指摘されている。

油画	准教授	大崎 宣之	研究では個展およびグループ展での作品発表（5件／国内3・海外2）をおこない充実した研究活動を行なった。大学運営では将来計画委員会委員長および工房委員会委員長の2つの委員会の委員長の活動、また社会貢献活動として文化庁の依頼による選考委員や愛知県の芸術家支援事業の協力など充実した活動をおこなった。
油画	准教授	猪狩 雅則	施設課委員会では、3期工事以降の工事期間中代替場所不足について様々な問題が噴出し、それらを解決するべく委員会全体で様々な角度から検討した。全ての問題が解決に至っていないため、継続して勘考していきたい。また、第4期改修工事の実施設計など建築会社と協力しながら対応できた。展覧会は一部屋でのグループ展であったが、出品者の試みを汲み取りながら話し合い、企画者の意図を踏まえ展示することができた。学生の指導は、相変わらず難しさを感じているが、学生の特性を見極めながら、対応できてきたように思う。
油画	准教授	安藤 正子	研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献の全てに於いて、全力で取り組みました。来年度以降も引き続き積極的に取り組みたいと思います。
油画	准教授	平川 祐樹	今年度は研究の一環でヨーロッパにて滞在制作・発表を行い、コロナ禍以降の国際的な現代アートの状況を直接見て体感し、その経験を学生へと伝えることができた。
油画	准教授	横山 奈美	本年度は、作品が京都国立近代美術館に収蔵されるなど、研究成果が公的に評価された一年となった。雑誌『装苑』での特集掲載や、次年度のアントワープでの個展に向けた国際的な発表準備を通じ、専門性の深化と発信力の強化に努めた。教育面では、自身の経験を共有しながら学生の思考力と表現力を伸ばす指導に注力した。大学運営では教務委員会業務を通じ円滑な運営に寄与し、社会貢献面でもメディアを通じた芸術文化の振興に尽力した。今後は国際的な活動をより本格化させるとともに、その知見を教育現場へ還元し、社会とのさらなる連携を目指したい。
油画	講師	田中 藍衣	それぞれの展覧会に向けて行った作品制作は、自身の研究内容を前進させるものとなった。また、次年度に行う制作に向けた研究も行うことができ、研究活動の充実が見られた。
彫刻	教授	高橋 伸行	実材を用いた造形の指導を軸に置いた彫刻専攻で、新カリキュラムにてインスタレーションの授業を取り入れたことにより、オープンスタジオでの学生の姿勢に少しずつ変化が現れた。鑑賞者への意識や空間や場への意識が高まり、ものの在り方から開かれた場の創出へと広がる積極性が醸成されたと感じる。瀬戸内国際芸術祭は初回の2010年から6回すべてに招聘され、アートプロジェクトを継続、2025年は原点に還りカフェで使用する器を当地の土で製作した。長期にわたるアートの取り組みから発展し、当地域の将来構想に関わる一員として高松市長が立ち上げた「大島を未来へつなぐ会」に参画し、今後はアートワークに限らず具体的な地域方策にも乗り出す。
彫刻	教授	竹内 孝和	教育活動、大学運営、社会貢献においては、概ね良好な成果を得ることができた。研究活動については、継続して取り組んできたテーマを軸としながらも新たな展開が生まれ、これまでにないほどの反響を得ることができた。今後は、さまざまな試作や素材研究を重ね、より一層チャレンジ精神に富んだ作品制作に取り組んでいきたいと考えている。
彫刻	教授	森北 伸	今年度は、教育活動、大学運営、社会貢献については概ね達成できたが、煩雑なスケジュールのため作品制作が思うように出来なかったため、来年度については達成するために努力をする。
彫刻	准教授	村尾 里奈	今年度は国際交流事業として、本学の協定校であるソウル市立大学彫刻学科のチェ・ヒョン氏を招聘し、彫刻専攻オープンスタジオ期間中に学内で作品展示を行い、学生間の交流の場を作ることができました。教育研究活動では、「パルテノン神殿の内部空間とアテナ神立像のスケールと空間性の研究」として、米国ナッシュビル、ワシントンD.C.およびニューヨーク市で調査研究を行いました。金属彫刻の研究では、「カラーステンレスによる着せ替え型彫刻作品のための制作研究—立方体のモデル—」と題した論文を紀要に投稿しました。
彫刻	講師	葉栗 里	今年度は研究活動に注力し、成果を上げることができた。また、社会と大学、美術の関係について考え実践する機会が増え、他教員との協働を通して多くを学んだ一年であった。
彫刻	講師	迎 英里子	計画に沿って研究活動・教育活動・大学運営・社会貢献の取り組みを行うことができた。特に研究活動では今年度は3件の展覧会/公演に参加し積極的に成果を発表した。
芸術学	教授	小西 信之	本年は、30年務めた本学を退職する年であったが、芸術資料館の全面工事が始まり、収蔵品全てを一旦移設するというとつもない大事業が芸術資料館長として巡ってきた。夏休みまでになんとかこの仕事を無事終え、後半は自分の研究の仕上げに、10月にオランダのアースワーク作品とドイツでの展覧会を見に行き、12月に自分の「美術評論選集」を小冊子として自費出版し、同月に最終講義を行なった。講義にはかつての教え子など140人近くが来てくれた。気付けば30年間もこの大学にお世話になったことになる。この場を借りて感謝の意を申し上げたい。

芸術学	准教授	本田 光子	研究面では隣接分野の研究者と共著論文を執筆し、学術誌へ投稿した（現在査読中）。教育面では他分野から進学した院生と留学生の研究生を指導し、卒論を指導した学生は桑原賞を受賞。博物館実習では17名が学芸員資格を取得した。特講（くずし字入門）は履修生から好評を得た。大学運営面ではカリキュラム改正や時間割調整に取り組み、社会貢献として文化財保存修復研究所主催リカレント講座を担当した。
芸術学	准教授	金子 智太郎	多くの委員会や専攻内の業務に携わり、教育・研究環境の改善に尽力した。また、展覧会や芸術講座の開催などを通じて、学外との交流も図ることができた。反省すべき点はあるが、おおむね目標を達成できた。
デザイン	教授	柴崎 幸次	概ね順調に実施できた。特に、研究や展覧会活動に関して、海外での発表や調査研究、科研費の進行など、順調に進めることができた。
デザイン	教授	佐藤 直樹	今年度は対外的・社会的な教育活動・発表活動に多くの時間と労力を費やす一年となった。その傾向は近年顕著となっており、大学や学生に対する貢献・社会に対する貢献という意味ではたとえ及第点をいただけたとしても、本分である自身の研究活動に関してよもや疎かになることがなかっただろうか、と自省しているところである。 来年度は、「研究活動」において「特筆すべき成果」を記すことができるよう努めたい。
デザイン	教授	本田 敬	専門の研究分野であるプロダクトデザインにおいては、地元のものづくり企業と協働が行えており、実績が目に見える形で受賞等にも繋がった。またデザイン賞の審査委員として、他分野の専門家と一緒に現在のデザイン界を俯瞰する機会をいただけており、それらを教育や活動に少しずつ活かすことのできた年度となった。
デザイン	准教授	夏目 知道	研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献、共に積極的に取り組むことができた。
デザイン	准教授	春田 登紀雄	研究・教育・社会貢献を相互に関連する実践として推進し、本学の創造性教育を社会課題および人材育成と接続する教育・研究モデルの構築を進めた。教育実践と研究成果の循環を通じて、本学の教育研究基盤の発展に継続的に寄与していくことを目指す。
デザイン	准教授	望月 未来	今年度は学外の審査委員や非常勤講師、受託事業の実施など社会貢献にまつわる活動が充実した一年でした。次年度も今年度に得た知見を活かして活動の幅を増やしていきたいと思えます。
陶磁	教授	梅本 孝征	年度を通して研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献において、成果を得ることが出来た。特に秀でた成果として 東海伝統工芸展での受賞。その他、全国公募展「菊池ビエンナーレ」入選。地域貢献として陶磁専攻「芸術表現コース」の課題として古川美術館との産学連携事業が挙げられる
陶磁	教授	長井 千春	美術学部長兼美術研究科長として大学運営全般に尽力した。一昨年度より継続して全学カリキュラム委員会でも専門教育及び教養教育に関するカリキュラムの見直しにとり取り組んだ。また、陶磁分野の教育においては、博士後期課程の学生3名を指導した。博士後期課程委員会委員長として実施した博士後期課程で主指導、副指導担当教員の資格制度改革により、令和8年度より新制度の運用が開始する。
陶磁	教授	崔 宰熏	本年度は、研究・教育・大学運営・社会貢献の各分野において積極的に取り組み、目標以上の成果を達成することができた。研究活動では、鋳込み成形や下絵をはじめとする多様な加飾表現の研究・制作を進め、「The Light」、「MUSUBI」、「suicao」、「MAYU」、「The Vase-NUGIRU」、「The Vase-Torre」などのシリーズ作品を発表した。特に「MUSUBI—縁2025—」が第6回金沢・世界工芸トリエンナーレに入選し、金沢21世紀美術館で展示されたほか、銀座和光セイコーハウスホールでの招待展を通じて、陶磁デザインの拡張性と国際性を示すことができた。 教育活動では、ソウル科学技術大学との交換留学制度の整備を進め、公募・審査体制を構築するとともに、交流展の実施や韓国語講座の開講に貢献した。また、台湾研修旅行の計画・引率や、LIXILショールーム名古屋との連携による展示指導を通じて、学生主体の展示運営と実践的な学修機会の充実を図った。 大学運営では、愛知県陶磁美術館での卒業・修了制作展開催に向けた調整と展示指導を行い、円滑な運営と質の高い展示の実現に寄与した。社会貢献においても、デザインコンペの実施や日韓中陶磁デザイン交流展の企画推進を通じて、産学連携および国際交流の促進に貢献した。以上のように、本年度は各分野において着実に実績を積み重ね、今後の教育・研究および国際的な展開につながる基盤を形成することができた。
陶磁	准教授	田上 知之介	計画していた社会性を意識した個の研究活動を実践することができました。また教育活動においては、特に産学官連携事業や国際交流事業をはじめとした学外での活動に積極的に取り組みました。研究活動や学外の視点を織り交ぜながら丁寧な指導を行い、質の高い教育・研究成果を出すことが出来ました。

陶磁	准教授	佐藤 文子	令和7年度の計画に基づき、各事項について積極的に取り組むことができた。欧州およびアジア11カ国の女性陶芸家が一堂に会した国際展覧会「2025 International Women Ceramist Jeju Festival in Korea」に招待され、シンポジウム登壇作家として参加した。本シンポジウムでは、「地域性とグローバル感性の融合」をテーマに、国際的な視点から意見交換を行う貴重な機会を得ることができた。これらの経験を、今後の陶芸教育および制作指導の取り組みに積極的に活かしていきたいと考えている。次年度においても引き続き、陶磁原料や釉薬分析を基軸とし、多角的な視点から陶芸表現の可能性を探求していく予定である。
陶磁	准教授	小枝 真人	本年度は、公募展での受賞や個展での発表を通して研究の成果と課題を確認することができた。教育面では、学生の公募展出品や国際交流の機会づくりに取り組んだほか、各種委員会活動や学外団体での役割を担い、大学運営および社会貢献にも努めた。全体として、求められる職責を意識しながら着実に取り組んだ一年であったと考える。
メディア映像	教授	森 真弓	各項目について、昨年度から継続して積極的な活動を行った。特に社会貢献活動では、国家資格試験である屋外広告士試験に向けた事前講習会の講師を務め、愛知会場の合格率の大幅アップに寄与した（参考合格率：全国36.1%、愛知会場53.2%、事前講習会受講者75.0%）。また研究活動では、名工大との共創事業「ARTFUL CAMPUS」にて、工学×音楽×美術のコラボレーション「MOOD」プロジェクトに尽力し、新しい価値創造について示した。
メディア映像	教授	有持 旭	今年度は講演及びトークセッションの企画を行い、国際映画祭や芸術講座など6件に登壇した。これらにより、愛知県のアニメーション文化に関する関心や教養の向上に貢献できたと感じている。作品はアナーバー映画祭（アメリカ）での上映のほか、国内外のギャラリーで展示上映される機会に恵まれた。理論研究では、科研費研究を継続しつつ、新たに大幸財団の研究助成によって、風景アニメーションに関する研究を開始した。また、メキシコ国立自治大学の研究者とアニメーションに関する共同研究を行い、国際的な学術研究と交流を深めていくことができた。大学運営においては美術学部入試委員長として、受験生や教職員に負担がかからないよう少しずつであるが、改革を実行できた。
メディア映像	准教授	池田 泰教	科研研究、日東学術振興財団助成研究共に予定した全ての実験を実施でき、継続してきた成果公開を本年度も行うことができた。また、現代ドキュメンタリーを紹介する上映会も4回目を開催し、特にソクーロフ作品を取り上げることができたことは企画上の大きな成果となった。本年度は専攻完成年度にあたり、卒業制作の指導を含めたさまざまな指導や外部展示へのサポートを実現できた。3名の学生それぞれの主題に並走し、作品として提示する過程は私にとっても教育上の冒険と試行錯誤に満ちており、大きな学びとなった。授業では本年も継続して複数のゲストレクチャーを設定し、オーバーハウゼン国際短編映画祭から関係者を招き、また、映像作家小森はるか氏らと共に作品上映を含む授業を行うなど、教育の充実を図った。
メディア映像	准教授	八嶋 有司	私が指導する学生が多数受賞し、しっかりとした外部評価を得たことが大きな成果である。作品発表はもちろんのこと、外部資金の獲得や企業との共同研究（初・中等教育へ向けた映像教材の開発）をスタートさせることができた。研究と地域貢献を連動させ、小学生を対象にした実践的な授業へと発展させることもできた。また、名古屋市広報に係る評価委員、国際コンペの審査員に任命されるなど、自身の専門性を地域、社会へ還元させることも実現した。
教養	教授	清道 正嗣	予定外のこともあったが、おおむね計画通りに実施できた。
教養	教授	石垣 享	教員不補充の為に委員会が増え、それに加えて次年度以降開講する初年次教育とキャリア教育の準備に多くの労力を割いた。これまでは、土日を研究の時間に充てていたが、前述した授業準備に時間が割かれたことで睡眠時間を削らざるをえなかった。その上に、依頼された講演を3題（子ども発育発達研究会、名古屋大学、朝日（新聞）高齢者セミナー）を行い、査読も3報も行い、2件の学会発表および4報の論文投稿も行った。また、学会の会長や理事として全ての会議、セミナー、学会大会に参加した。また、体育館の改修工事のために、打ち合わせや、物品の整理等が加わり、本学に赴任してから、最も過酷な1年間であった。